

「ハイデガーの終末論的政治概念」^{エスカトロギッシュ}

小野紀明（京都大学）

序 — 現代政治学におけるハイデガーの影響

今日、政治学においてハイデガーに対する関心は一定の高まりを見せているが、その理由は、政治学においても「反哲学」に対応する「反政治」ともいうべき考え方が強くなりつつあることに求められる。実践としての政治の主張や形而上学的政治批判といった「反政治」的政治学の出発点にハイデガーを認め、政治的関与とは別に改めて彼の政治哲学が問い直されているのである。

1 ハイデガーの存在論的政治概念におけるアリストテレスの影響

初期の頃から彼は、アリストテレスの著作を通してポリスに単なる政治的共同体を越える特別の意義を与えていた。ポリスとは端的に存在の開示される場であり、ポリスに関わる事柄 (politikē) とはいわば存在への^{ソルグ}気遣いを意味していた。ハイデガーの場合、一貫して「政治的なもの」とは本来の字義のままにポリスに関わる事柄、即ち存在への気遣いそのものを意味していた。つまり、政治はオンティッシュな次元を越えてオントロギッシュな次元に関わる特別な営みであり、また政治学は気遣いという実存論的次元に関わる知なのである。我々は、彼の政治哲学の本質を以下の点に求める。即ち、政治とは、オンティッシュな次元で固定された存在物相互の諸秩序を解体して人間を存在忘却から救出して共同存在としての在り方へともたらし、そのことによって人間に根源と土壌を、そして自由を回復し、人間を存在の明け透きへと連れ戻す営みである。しかしながら、オンティッシュな秩序の存続を認めず、寧ろ常にそれを解体するところに使命を見出すハイデガーのオントロギッシュな政治には、現実世界に破滅をもたらす終末論への志向性が窺えるのではないか。

2 ハイデガーの終末論的政治概念におけるアリストテレスの影響

政治の終末論的性格におけるアリストテレスの影響を考える上で注目されるのは、アリストテレスの「限界」(peras) や「最終的なもの」(to eschaton) に加えた彼の解釈である。「限界」と「最終的なもの」との関連性についてはアリストテレス自身が『形而上学』で述べているところであるが、24年夏学期講義『アリストテレス哲学の根本諸概念』においてハイデガーは、存在論的差異に立脚して、「限界」も「最終的なもの」も、全体としての存在物、つまり存在がその都度現れる或る存在物の姿であると解釈する。

「我々が『形而上学』第5巻第17章に見出すのは、限界、限界付けられていることは、[存在物に] 本来的な現 (da) という特質を与えるということである。限界とは、最終的なものということであり、つまり、“その都度現存在するものの最も表層的な部分 (das Äußerste) であり、その外部では (außerhalb) 当該の現存在するものに出会うことはなく、その内部では (innerhalb) 当該の現存在するものの全体 (das Ganze) を見ることができる。”

アリストテレスはまた「最終的なもの」「個別的なもの」を認識する能力について、^{エドイエイケイア} 衡平

、
即ち、一般的な規定に収まらない個別的なものに配慮することは、^{グノーメー}洞察という認識能力の役割であると説明している。ハイデガーは、24/25年冬学期講義『プラトン「ソピステス」』のなかで、まさにこの箇所注目して、実践的能力としての慎慮が、「最終的なもの」つまりロゴスをもって把握し得ない「その都度単独でそこに在るもの」「その都度いつも他のもので在るもの」を認識する能力であり、畢竟、それは存在そのものを認識する能力であると解釈する。

「慎慮はロゴスよりも寧ろ実践のなかに存している。… ^{アントローボス}人間が^{ゾーオン・ポリティコン}ポリス的動物である限りは、慎慮は共同相互存在における存在として理解されねばならない。そして実践が目的である限りは、慎慮は政治的なるもの (politikē) に属しているのである。」

要するに、ハイデガーの考える政治とは、共同存在である人間が相互の実践活動を通して慎慮によって「^{ト・エスカトシ}最終的なもの」つまり存在を開示しようとする営みである。それ故に彼の政治は必然的に「^{ト・エスカトシ}最終的なもの」の救出に向けられており、その意味で終末論的な色彩を帯びる。「最終的なもの」、存在物の本質を規定している一般的意味に包摂し得ない純粋な個物、要するに存在が露呈するとき、意味に基づく存在物相互の日常的秩序は根底から破壊されるであろう。それはまさに破局の瞬間であり、終末の到来である。無論、それはキリスト教的な終末論とは異なる。カイロスの時間に基づくハイデガーの終末論は、終末へと必然的に向かうべく摂理という根拠により定められたクロノスの時間を前提にしていなからである。

結 — 存在論的政治概念の危険

最後に、リアリズムを旨とする政治学を学ぶ者として私が主張したいのは、徹頭徹尾オントロギッシュな次元で「政治的なるもの」を考えようとするハイデガーの政治観が、所詮はオンティッシュな次元で終始する現実政治に対して有している危険性である。